

「やる気応援奨学金」レポート

アメリカで起業家精神を学習 スペイン語学習びインターンも

法学部国際企業関係法学科四年 石井 洸（私立中央大学附属高校）



はじめに

私は二〇一二年八月から二〇一三年五月まで法学部より「やる気応援奨学金（長期海外研修部門）」をいただき、アメリカのカリフォルニア州にある「サンディエゴ州立大学（以下、SDSU）」に留学をしました。以下では現地での生活を振り返りつつ、留学へ至る経緯や直面した困難、達成した成果などを留学や海外研修を志す皆様及び今回の留学を支援してくださった方々への御報告という形で記させていただきます。

なぜ留学？なぜSDSU？

留学を志した最も大きな理由の一つに「英語がしゃべれたらかつ

こいい（笑い）」ということがありました。中高と英語が好きで聴くのは洋楽、見るのは海外ドラマという見事なアメリカかぶれを發揮していた私は、「大学に入ったらアメリカのどっかに留学する！」という漠然とした思いを抱いていました。転機が訪れたのは友人が一年次の夏季休暇を利用し、「やる気応援奨学金」を得て語学留学をしたという話を聞いたことでした。そんな制度があるとは寝耳に水、すぐさま次回募集に向けて準備を始めましたが、コツコツと計画を練るのが大の苦手な私はあえなく不採用となってしまいました。しかし、この失敗こそが私に火を付けた。なぜ留学をするのか？何にならなくて、何がしたいのか？」を

再確認させる契機になったのです。そして長期留学をするに当たって最も必要だと感じていた海外経験を積むために、二年度に同奨学金の短期語学研修部門英語分野の奨学金に応募して、ニューヨークでの四週間の語学留学を実現させ、着実に準備を整えていきました。中央大学とSDSUの交換留学プログラムは二〇一二年度から始まりました。交換留学生第一号になることを非常にチャレンジングで刺激的なものであると考え、具体的に何を学びに行くのかを明確にしました。そして私が立てた三つの目標が、①ビジネス（起業家精神）の学習②スペイン語の学習③インターンシップを経験すること、でした。先の短期留学でいか

にスペイン語が使用されているかを知った私は、地理的にメキシコ（スペイン語圏）に近いサンディエゴを留学地と決め、ビジネス系科目の授業に定評のあるSDSUでの留学を決意しました。

留学生生活最大のピンチ！

総学生数三万人を超える大規模なSDSUでは新入生が入学する時期にはトラブルがよく発生するようでした。というのもアメリカの公立大学の施設は近隣住人を含め誰でも利用することが出来るので、ジムやテニスコート、図書館から食堂に至るまで学生以外にも自由に入出入り出来る状況だったのです。そんな中まだ時差ボケが残り、何もかもが目新しく映る留学生生活一〇日目、私は図書館のトイレで襲撃され携帯電話を奪われそうになってしまいました。幸運にも被害はなかったのですが、海外でこのような手荒い洗札を受け「開始早々面倒なことになったな

あ」と思いました。その後ルーム

メートの助言もあり警察に連絡を取り、犯人グループは逮捕され、私は法廷で証言をするように言われました。私が、「お金がもつたいないし朝早いからタクシーをよこしてください」と弁護士に電話したところ、そこはアメリカ、「有罪は決定したから、もう来なくても良いよ」との返事が返ってきた。(笑い)、事なきを得たのでした。当時はなぜ自分が?という思いでしたが、それ以降どんなことにも動じずに行動出来るようになったので、今では良い経験をしたなあ

と思います。

ーIT企業でのインターンシップ

春学期には私の留学の柱の一つであったインターンシップを経験することが出来ました。“Rovi Corporation”という会社で、同社が開発・販売している“DivX”という音楽・動画を管理するソフトウェアのカスタマーサービス部門で、主に日本からの問い合わせへの対応や、新製品プレスリリースの翻訳などを担当しました。母国語レベルで日本語を使用することが出来る人がいないため、日本語サポートに関する際には私が全責任を負うという環境で仕事が出来るとに魅力を感じました。五〇頁は優にあらうマニュアルを読み込み、ソフトウェアの動作不良の原因究明や解決法の提案などを一人で行わなければならなかったりと苦労することもありましたが、チームのメンバーや上司と協力して課題を解決することに日々刺激を受け成長することが出来たと実感しています。このインターンシップはSDSUの日本語学科のプログラムでもあったので、単位取得と共に学期末にはSDSU及び共催の

京セラから“27th

Annual Kyoto Best Student Award”と奨

学金をいただくことも出来ました。

スペイン語の学習

とペルー旅行

南米、特にメキシコからの影響を強く受けているサンディエゴにはレストランや娯楽施設を含めほとんどの場所でスペイン語での案内や表記が見られます。故にスペイン語を目にする機会はとて多く、スペイン語を話す人々と接することもかなり多かったのが幸いし、一年間を通して週四回のスペイン語クラスではA評価を獲得することが出来ました。現地の外国語教育と日本のそれとの最も大きな違いは、とにかくスピーキングに割く時間の多いことと、先生がほぼ全員ネイティブスピーカーであるという点だと感じました。むしろ英語をうまくしゃべれる先生の方がまれで、故に学生も外国語でのコミュニケ

ツアーガイドの方とマチュピチュにて



ーションを取らざるを得ない環境に出来るようになるんだなあと感じました。多民族国家であるアメリカだから出来ることなのかも知れませんが、日本でも同じようなシステムで勉強をすることが出来たら、英語も含め日本の国際競争力も少しは上昇するのではないかと感じました。

冬休みはおよそ三週間ありましたが、そのうちの一週間強を南米のペルーで過ごしました。アメリ



京セラ Best Student Award 授賞式にて

カ以外の国へ、しかも英語が通じない国への旅行が初めてだった私にとっては驚きの連続でした。飛行機の機内放送では、スペイン語の案内がほとんどで、たまに流れる英語でのアナウンスはとてつもなく強いスペイン語なまりで、全く英語に聞こえませんでした（笑い）。一〇時間ほどのフライトを経て首都リマに降り立った私と友人は、英語が話せない現地ツアー会社の方と、三歳児レベルの基礎スペイン語を使ってコミュニケーションを取り、予定を把握しました。しかしほっとしたのもつかの間、二日目に訪れた地上絵で有名なナスカで、経験したこともないほどの腹痛に襲われ、その後二週間以上はトイレと共に壮絶な日々を送ったのでした。正露丸も、台湾人にもらった本場の漢方も効かず、踏んだり蹴ったりの旅行になってしまいました。腹痛に耐えて登ったマチュピチュの壮観はまさに圧巻の一言でした。面白かったのは人間やはり慣れるもので、三日もすれば頭の中はもうスペイン語でいっぱい、英語で話し掛けられているのにスペイン語で反応したりしていました。これはアメリカ



大学テニス対抗戦でアリゾナ遠征

には経験出来なかったでしょう。旅行することと生活することはやはり違いますが、それでもどにかやっていくためには必死で適応していくしかないことに気付けたこと、また予想以上にスペイン語がしゃべれたことによる自信がこの旅で得られたものです。

ようやく学習出来たEntrepreneurship

アメリカの履修制度は少し変わっており、prerequisiteと呼ばれる基幹科目を履修してからでない

より専門的な科目を勉強出来ないという点に最大の違いがあります。私が勉強したかったEntrepreneurship―起業家精神―という授業を履修するためには、まず秋学期で基礎科目であるManagementでのC評価以上の獲得がprerequisiteとなっていたので、春学期に入ってからようやく留学の柱の最後の一つのスタートラインに立つことが出来たのでした。そして念願かない履修したFundamentals of Entrepreneurshipのクラスでは、六〇人ほどの受講生が各々考えている新しいビジネスモデルを提案し、その中から実現可能性や革新性に富む案を幾つか選び、その実現に向けてビジネスプランやビデオ広告をグループで作成するという作業が主でした。私たちのグループはスマートフォンを利用したスケジュール管理やカロリー計算、ネットバンキングなどを可能にするアプリケーションを担当しそれについてのプレゼンテーションを学期末に行いました。私たちのグループは最も留学生が多く、出身はアメリカ、ドイツ、チリ、日本とさまざま、中にはアマゾンの物流管理のインターンをしていた人や、サンディ

エゴでサーフィショップをオープンしている人、更には、家族ぐるみのフィットネスビジネスの財務担当者などいました。さまざまな価値観や考え方を持っている彼らとの共同作業はとても刺激的で、充実した授業でした。

おわりに

今回の留学での「やる気応援奨学金」は、資金面のみならず、目標を明確にするということに関して非常に大きな助けとなりました。ここまでしっかり計画を立てなければこれほどの成果を得ることも、これから先の目標を設定することも出来なかつたでしょう。先を見通して自らアクティブに行動していくこと、何事にも動じずに対応していくことの大切さこそ、私が留学で得た教訓です。これらを胸に卒業後も精進していきたいと思っています。先生方やリソースセンター、事務室、国際センターの方々、サポートしてくれた家族や友人たちには御迷惑をお掛けしてしまつたことも多々ありましたが、この経験は私の中で一生光り輝くでしょう。本当にありがとうございます。